

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	福田 裕大
------	---------------	----	-------

論文題目	シャルル・クロの総合的研究 ——科学的業績と詩的業績の架橋を目指して
------	---------------------------------------

(論文内容の要旨)

シャルル・クロ (1842-1888) という人物は、『白檀の小箱』や『鉤爪の首飾り』といった作品集を世に問うた詩人であっただけでなく、色彩写真や蓄音機といったテクノロジーの最初期の考案者でもあり、文学のみならず科学的探求にも並々ならぬ熱意を示した人物であった。しかし1969年にレイ・フォレストイエの大著『シャルル・クロ 人と作品』が出版されて以降も、彼に関しては散発的な論文が発表されるに留まっており、しかもそれらの多くはクロの科学的業績に対する目配りを欠いている。他方、メディア研究の領域でもクロの発明に対する言及が見られるが、そこでは作家としてのクロの実像が完全に忘却されており、加えて、当の科学的業績に関しても実際のテキスト読解を欠いた不正確な伝聞的情報を流通させてしまっている。こうした点をふまえたうえで、本論文は次のような研究方針と目的を提案する。すなわち、文学研究、メディア論、科学技術史などの知見を駆使しながら、まずクロの科学的業績と詩的業績の双方をともに十分に考察すること。次に、こうした間領域的研究から得られた個々の成果を重ねあわせつつ、科学と文学を俯瞰するような視座を構築することによって、「詩人にして科学者」であったこの人物を総合的に研究する可能性を提示することである。

まず第一章では、クロが実現した色彩写真は、対象世界の像の固定や記録を旨とするような今日的な写真観からはかけ離れており、むしろ彼自身が抱いていた知覚論との連関において、人間の視覚の機能を機械的に模倣するために構想されていたことを検証する。しかも視覚についての彼の理解は当時であってきわめて先鋭的なものであった。彼の色彩写真論においては、人間の眼は対象の像それ自体を受け取っているのではなく、与えられた刺激の最小単位 (クロの場合は三原色) を集積することによって、対象の色彩や像を再創造する器官として捉えられていたのである。

第二章では、クロの蓄音機研究に関する既存の言及の妥当性を吟味しつつ、このテクノロジーにたいしてクロが抱いていた想像力を浮き彫りにしている。そもそも、クロの蓄音機の構想はひとつの技術開発の実践として十分な密度を有したのではなく、同時期に進行していた色彩写真研究から技術的な流用をなすことによって着想された、ごく原型的なアイデアでしかなかった。とはいえ、こうした技術的な流用によってクロが「音」にかかわる領域へと問題を移しかえることができたのは、彼の蓄音機構想の基盤となる部分に、上述の色彩写真研究と同様、ひとの知覚のはたらき全般に関する固有の思考が据えられていたからにはほかならないのである。

第三章では、上記のような科学的業績についての研究に続いて、クロの詩作品に関する分析を行っている。具体的には、クロの第一詩集『白檀の小箱』の構成要素 (断片的印象、風、緑色のイメージなど) をそれぞれ吟味することにより、これまでもっぱら神秘主義的な解釈のみを施されてきたこの詩集について、以下のような新たな見解を提示した。すなわち詩人としてのクロは、世界の彼方にある理想の地への想いなどを表現しようとしているのではなく、むしろ対象世界それ自体へ到達することの困難さを引き受けるところから詩作を開始している、ということである。結果として彼の詩の企図は、

対象世界から何らかのアイデア的トポスへと向かうようなものではなく、自身のもとへと漂着した世界の断片や反映（女性の髪や花々の香りなど）を素材とした「ファンタジー」の創造を、自身の感覚世界の内部で成し遂げることを目指す。

以上の論をふまえれば、クロの色彩写真（あるいは蓄音機）と詩的創造の間には、人間と世界の関係の把握という水準において、ひとつの共通点が見出されることになる。すなわち、普通であれば人間の身体の外側に存在していると考えられている「世界」をいったん括弧にいれ、外界から人間へと届けられるわずかな刺激や反映をたよりに、世界像を内的なトポスで再構成、再創造するという発想こそが、クロの様々な探求を統べる基本姿勢であるということである。本論の締めくくりとなる最終章では、クロの知覚論『脳のメカニズムの原理』の分析を通じて上記のような基盤的思考の実態を浮かび上がらせるとともに、当の発想をもとにして、「詩人」としてのクロと「科学者」としてのクロの業績をつなぎあわせ、「詩人にして科学者」であったこの人物を総合的に研究する可能性を提示した。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文で取り上げられているシャルル・クロという人物は、19世紀後半のフランスにおいて文学の領域と科学の領域で優れた業績を残しながらも、その多面性ゆえに従来フランス本国においても、総合的な視野からの研究が少なかった人物である。そうした状況に対して、申請者はクロの持つ多様な面に通底する世界観や思想を抽出しようと果敢に挑み、注目すべき成果をあげたと言えるだろう。

この目的のために申請者がとった方法は、色彩写真、蓄音機そして詩という三つの分野におけるクロの思考や創作の特徴を、いちどそれぞれの分野ごとの個別の論理に従いながら深く追求した後に、そうして現れた特徴の総合をはかるというものである。従来の研究では、科学の領域か文学の領域かのいずれかからもう一方を照射することが多かったため、この方法自体が本論文の独自性を証明するものである。

まず色彩写真であるが、科学の領域におけるクロの様々な試みの中でも、これはとりわけ彼が終生関心を持ちつづけ、改良を重ねたテーマであった。しかもここでクロは、人間の眼が色彩を感じとるメカニズムをいったん三原色という基本的な単位にまで分解し、それを再合成するという方法をとっており、当時の生理学における最先端の成果に基づきながら自らの理論を構築している。また、彼の研究が現実的な成果をおさめるに至ったきっかけとして、優れた印刷工との出会いがあったという点も興味深い。

蓄音機の方は、クロが散発的な関心しか寄せなかったこともあり、今では、フランスを除いて、エジソンのみが発明者として認知されているような状況であるが、クロが提唱した円盤上への音の波形の記録という方法は、当時としてはきわめて先鋭的な発案であった。しかもこの方法をクロは、同時期に彼が取り組んでいた色彩写真における印画法の応用として発想したのであった。

一方、詩の領域においてクロは、従来ユーモア詩人としての面からのみ注目され、その他の詩の領域ではマイナーな作家として扱われてきてきた。申請者もまたクロを大詩人として評価しようとしているわけではない。むしろ申請者がめざしているのは、科学の領域において充実した成果が多産された1870年代後半に出版された『白檀の小箱』（第二版）を構成する詩群を分析する中から、クロ固有の世界のとらえ方を浮かび上がらせることである。事物や人間の実体よりも、主体と客体の間に漂い出る香りや色合いを描こうとする態度が、クロの詩作に一貫して現れており、緑色や風といったテーマの重要性もそこから帰結する。

最後に申請者は、クロが残した脳のメカニズムについての論考を詳細に分析することによって、彼が知覚について独特の理論を構築していたことを明らかにし、そこに見られる外界から人間へと送られる刺激の分析と再構成という発想が、科学と詩という二つの領域をまたいで、クロ独自の世界観を形成していると結論する。

十全な論考であると言えるが、欠点がないわけではない。たとえば、詩の分析にお

いてはクロが書いた詩の全体を検討すべきだっただろうし、フランス語原文へのより丁寧な参照も求められる。知覚論の分析においてはさらなる展開の可能性が残されている。またしばしば現れる晦渋な表現が、論考の理解を妨げていることも残念であった。

しかしながら本論文の主張は、残された資料を丹念に読み込んだうえで、同時代の状況を考慮しつつ、慎重に提示されており、十分な説得力を持つものであると判断できる。

以上のことから、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値を持つと認める。また平成24年7月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。  
要旨公開可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降